

原発被災地で〈住民になる〉論理

-なぜ農地への働きかけは事故以前と同じ周期リズムで続けるのか-

東北学院大学大学院 人間情報学研究科 人間情報学専攻 博士後期課程 庄司貴俊

1 目的

本報告では、原発事故により農業を続けることができないにもかかわらず、人びとが事故後もそれ以前と同じ周期で、農地への働きかけを続ける理由とその社会的意義を明らかにする。2011年に福島県で発生した原発事故は、多くの住民から故郷や生業を奪った。本報告が対象とした集落の農家も、事故の影響により多くの方が居住地域を離れ、その結果みな一様に生産活動から身を引かざるを得なくなった。さらに、再開の意志すら持っていない。しかし、一方で生産性を見込めない土地でも荒らさないように（農閑期を除いて）手入れを続けている。

注目すべきは、事故後に農業をやめたにもかかわらず、人びとの手入れが農繁期にのみ行われている点である。人びとは春先になると準備をはじめ、夏になると朝日が上がる前に活動を行い、冬になると土地と関わりをもたなくなる、このようなリズムを刻み続けているのである。もはや、このような生活習慣は生産の意味が失われた今一体なぜ行うのだろうか。というのも、人びとが活動を行っている原発事故後の状況は、彼らからみれば帰還の目途が示されず、仮に示されたとしても延期され、生活の定点が見出せない状況であるからである。この点も彼らが生産活動をやめ、再開の意思をもてなくなった一因となったが、ではなぜ他方で農地への働きかけについては事故以前と同じ周期リズムで続けるのだろうか。本報告では以上の問いについて考察する。

2 研究方法

集落でフィールドワークを行い、人びとへの聴き取りで得た知見をもとに、震災直前の人びとの暮らしの様相、および半世紀以上前の暮らしの様相を軸に考察を試みる。

3 結果

人びとは「土地を荒らさないこと」を最優先に活動していた。農閑期にあたる期間は、手入れをせずとも土地が荒れることはないため、彼らは行動を起こさない。このように土地の荒廃を避けようとする理由の1つに恥の感情がある。半世紀以上前から「集落の人間は働き者」だと農家同士で話されていた。それゆえ、土地を荒らすことは笑われることだと考えられていた。換言すれば、事故後も土地を荒らさないでおく恥をかかずに「集落の人間だからね」といった形で他者からみなされる。しかし、単に働きかけても意味はない。なぜなら、農閑期に手入れを行っても、人びとから集落の住民とは思われず、むしろ「なぜ今やるのか」といった困惑を与えるからである。すなわち、周期に沿うことで、集落の人間関係のなかで恥をかかずに、集落の一員として認められると、人びとは考えているのである。

4 考察

以上から、人びとの活動は集落の“当事者になる”ことを意味していると考えられる。原発事故により場所から単なる空間へと化した集落で、その当事者であることを認識し続けることは難しい。しかし、周期に沿って働きかけることは、恥にみられるように、自らが在住の当事者であることを自覚させ、他者に対して相互認知し合うための共通の社会的行為になっていた。

事故後の先行きが不透明ななかで、同じ周期で活動を続けるには日常実践の推進力の確保を必需とする。本報告によれば、それは空間と化した集落の当事者であり続ける意思にこそある。そこには集落住民になるという社会的意義が含まれていると考えられる。